

A March 2019 Report regarding a Village in Zhejiang Province in eastern China (14)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Benno, Saiichi メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00058175

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



華東農村訪問調査報告(4)

—— 2019年3月、浙江省嘉興市の農村 ——

弁 納 才 一

はじめに

筆者は、2008年3月から10年余りにわたって華東地域の農村を訪問し、聞き取り調査を行ってきた¹⁾。

そして、筆者らは、2018年からは華東師範大学教授の張文明と近現代中国農村社会に関わる学術交流を頻繁に行うようになった。すなわち、2018年2月23日には金沢大学環日本海環境研究センターが主催した国際シンポジウムに張文明らの中国側研究者を招聘して筆者などとともに報告を行った²⁾。また、同年3月19日には筆者らが上海市を訪問して張文明と今後の学術交流について意見交換を行い、翌2019年には華東師範大学で国際シンポジウムを開催することを計画した³⁾。さらに、2018年5月に張文明に招聘された内山雅生(宇都宮大学名誉教授)が華東師範大学で講演を行うのに同行して張文明と意見交換し、その後、同年10月25日には張文明に招聘された筆者が華東師範大学社会発展学院で講演を行った⁴⁾。

こうして、2019年3月末、華東師範大学社会発展学院と金沢大学環日本海環境研究センターが共催する文理融合型の国際シンポジウムが上海市の華東師範大学で開催され、筆者も報告を行った。その際、金沢大学側からの参加者は理系の塚脇真二・唐寧と文系の小林信介・古泉達矢・弁納才一の計5人だった。3月28日(木)に小松空港から上海浦東空港へ移動し、翌29日(金)には張文明に浙江省嘉興市新塍鎮内のモデル農村を案内していただいた。そして、30日(土)はシンポジウムで各自が報告し、中国側の研究者たちと意見交換を

行った。翌31日(日)には各自が今回の学術交流と農村参観に関する成果を整理し、文系の小林信介・古泉達矢・弁納才一の3人で意見交換を行った。4月1日(月)に上海浦東空港から小松空港に帰国した。

よって、本稿は2019年3月末に上海市と浙江省嘉興市の農村への訪問に関する記録を整理したものである。

なお、本稿では、主に煩雑さを避けるために、原則として敬称を略すとともに、算用数字と常用漢字を用いることにした。

I. 農村参観－浙江省嘉興市秀洲区新塍鎮



写真1. 新塍鎮政府

3月29日(金)、金沢大学側から今回のシンポジウムに参加した5人と中国国内からシンポジウムに参加した中国側研究者のうちの2人の計7人は、華東師範大学の張文明が手配してくれた運転手付きのマイクロバス(華東師範大学の公用車)に乗車して9:20頃にホテル(上海市普陀区の上海国豊酒店)を出発し、11:10頃に浙江省嘉興市秀洲区新塍鎮政府庁舎(写真1を参照)に到着した。

我々が同鎮政府庁舎に到着するまでの移動中の車窓からは、同鎮内のあちこちで桜の花よりもやや濃いピンク色の桃の花と黄色い菜の花が咲いているのが見えた。同鎮政府の幹部職員らから聞いたところによれば、近年、当該地域では水稲作の他に桃の木の栽培が盛んになっているという。



写真2. 新塍城市客厅

我々が乗ったマイクロバスが同鎮政府庁舎に到着すると、すぐに同鎮政府の幹部職員らが乗車した公用車に先導されて同鎮政府の展示場である「新塍城市客厅」(写真2を参照)まで移動した。同展示場では、同鎮の全景がミニチュア(巨大なパノラマ?)として作られており、その全面には大画面のモニターに同鎮の歴史や近年の都市化建設と急速な経済発展の様子などの動画が

映し出されていた。そして、同展示場内には同鎮の近現代養蚕業史に関わる展示ブースの他に、「潘家浜村」「天福村」「思古橋村」「観音橋村」の4つのモデル村に関する簡単な説明書きが記載されたパネルも展示されていた。同鎮政府のガイド担当の若い女性職員が展示内容に関して手際よく流暢に説明してくれた。当日は、我々以外には参観している人はいなかった。同展示場は、一般の観光客には開放されているわけではなく、国内外からやってくる公的な視察団向けの施設だったと思われる。

こうして、同日午後に我々は上記の4つのモデル村のうちの2ヶ村（「潘家浜村」と「天福村」）を同鎮政府の幹部職員らに案内してもらって参観することになった。



写真3. 新塌城市客厅の川向こうの風景

なお、「新塌城市客厅」の敷地内（水路の上に小さなアーチ状の橋がかかっている庭園）を流れている水路の水はかつてよりもきれいになったという説明を受けたが、筆者の目には依然としてかなり濁っているように見えた。しかも、その建物の川向こうには新築の高層マンションが林立していたが（写真3を参照）、その川の水も非常に濁っており、決してきれいとは言えなかった。

また、同敷地内の小道には「崇尚科学、反对邪教」「反邪教」などと書かれた小さな看板がいくつか地面に打ち付けられていた。

昼食は、近年、「新塍古鎮」として整備された商店街にある小さなレストランで同鎮の幹部職員らといっしょに食べた。だが、そのレストランは「古鎮」の風情を出すために意図的に伝統的な造りになっており、座り心地があまり良いとは言えない木製の幅の狭く堅い長椅子に座って食べることになった。しかも、伝統的な田舎料理が出されたが、あまりおいしいとは思われなかった。



写真 4. 李家浜村内の家庭ゴミ分別収集車

そして、昼食後、近くの著名な公園(入口の門の上には「小蓬萊」の文字が見える)で樹齢が100年や1,000年にも達するという古木樹などを参観した(入口には入園料金徴収窓口があったが、参観料はすでに徴収なくなっていた)。ただし、同園内には明らかに異常な測定値を示している湿度計が設置されていた上に、不自然かつ不可解な日本語や英語による説明書きがいくつかあった。そもそも、昼食をとったレストラン内にはトイレがなかったので、食事をする前にこの公園の入口の側にあった公衆トイレを利用した。田舎の公衆トイレとしては比較的清潔だった。

同日午後、同鎮政府の幹部職員たちが我々を家庭ゴミ分別収集のモデル村となっている天福村内の自然村の1つである李家浜村と「生態文明建設」を推進している潘家浜村に案内してくれた。

我々が李家浜村を訪問した時、ちょうど制服を着たゴミ回収員が家庭ゴミを回収していた(写真4を参照)。同日、ゴミの回収に際しては、ゴミ回収員の他にゴミ回収監視員(同村民か?)がゴミの回収作業を監視していた。なお、同村のゴミの分類は「腐爛」ゴミと「不腐爛」ゴミの2分類だけだった。ただし、張文明によれば、上海市街地ではこれよりも一層細かな4分類となっているという。



写真5. 李家浜村内の農家の家

李家浜村には3階建ての立派な豪邸が何軒も見られ、家の前には自家用車が駐車していた(写真5を参照)。

我々を案内してくれた同鎮の幹部職員からは、李家浜村では上水道がすでに完備しているという説明を受けた。ただし、同村内の川沿いに設置されていたゴミ回収箱のすぐ側には井戸があり、洗濯用の化学洗剤入りの容器なども置いてあったことから、同村の住民はこの井戸水を汲み上げて洗濯をして

化学洗剤入りの汚水をその川に垂れ流していたようだった(河川への家庭ゴミの不法投棄とともに化学洗剤を含む汚水の垂れ流しは極めて深刻な事態であると思われる)。実際、この河川はかなり汚濁しているように見えた。

同村内では依然として大麦(夏作は稲)と桑が栽培されており、脱農化が激しく進行しているわけではない。また、「新塍城市客厅」の庭園内と同じように、同村内にも「増強法治観念、自覚抵制邪教」「反邪教」と書かれた小さな看板がいくつか地面に打ち付けられていた。

一方、潘家浜村は同村内に様々なモニュメントやオブジェがあり、完全に観光地化しており、同村全体がいわゆるテーマパークのようになっていた。もちろん、同村内には桑の木などが植えられてはいるが、上海市などの都市住民向けの貸農地(週末の休日などに農作業を体験する畑)、「民宿」、商店などがあり、当日も多くの観光客(小中学生と思われる修学生の団体を含む)が訪れていた。ただし、当日、農作業をしている人は全く見かけることがなかった。よって、筆者にとっては、同村は「農村」と呼ぶにはあまりにも不自然で、強い違和感があった。

同村内を一周した後、同村内の土産物屋の前に設置されていたテーブルで新塍鎮政府副書記の沈曉華が同鎮内の農村における家庭ゴミ分別収集などに関する概況について説明した後に、簡単な質疑応答が交わされた。同副書記からは日本のゴミ分別収集の事情について質問があった。

これに対して、筆者が同鎮の農村社会経済にかかわることについていくつかの点を尋ねてみると、以下のような説明があった。すなわち、2018年現在、同鎮の水稲作地面積は5万畝余りだが、近年は梨や桃の果樹栽培も盛んになっている。嘉興市はもとよりもち米を材料とする粽の生産地として有名であり、また、醸造酒である黄酒もその主要な材料がもち米であることから、もち米に対する需要は高いが、もち米は単位面積当たりの収穫量がうるち米よりも少ないので、その販売価格も高くない。そのため、近年は多くのもち米を主に東北部から移入している。2019年現在、同鎮における農業従事者のほとんどは60歳以上の高齢者となっている。若い人は都市部で働いているが、戸籍は「農戸」のままである。なお、同鎮内にあった郷鎮企業は1995年前後に民営化した。

夕食は、嘉興市内の高級ホテル(元々は嘉興市政府の招待所があったが、2019年3月現在は日本人が最高経営者であるという)で張文明の知人(実業家)の招待を受けてごちそうになった。ちなみに、同ホテル内にある別のレストランでは寿司などの日本食が提供されていた。

II. シンポジウム参加

3月30日(土)早朝、華東師範大学社会発展学院の大学院生たちが我々(日本及び中国国内から参加した報告者)を宿泊していたホテル(国豊酒店)まで出迎えに来てくれた。タクシーに乗って8:00頃にホテルを出発して同大学普陀区校舎に到着した。こうして、8:30~17:15、シンポジウムが開催された。今回のシンポジウムにおける全体のタイトルは「中日快速工業化時期的城郷関係と可持続発展」(日中両国における高度成長期の都市・農村間の関係と持続可能な発展)だった。

中国側の報告者は、文系の張文明(華東師範大学、一橋大学大学院卒、社会学)・楊麗君(華南理工大学、一橋大学大学院卒、社会学)・袁堂軍(復旦大学、一橋大学大学院卒、経済学)・朱偉鈺(同済大学、名古屋大学大学院卒、社会学)・胡艶紅(華中師範大学、筑波大学大学院卒)・呉金海(華中師範大学)と理系の達良俊(華東師範大学、千葉大学大学院卒、生態学)・韓驥(華東師範大学、名古屋大学大学院卒、環境学)・魏永傑(中国環境科学研究院)の計9人だった。このうち、胡艶紅は2018年5月に内山雅生が華東師範大学社会発展学院(閔行区校舎)で講演した際に通訳を担当してくれた⁵⁾。また、魏永傑は2018年2月に金沢大学環日本海環境研究センター連携部門主催の国際シンポジウムに参加して報告していた⁶⁾。

以上の中国側からの参加者は、ほぼ全員が日本の大学院で博士号の学位を取得しており、参加者全員が流暢な日本語を話すことができ、日本における研究状況を熟知していた。よって、それぞれの報告・発表及び質疑応答や総括討論などは全く通訳を介することなく基本的に日本語で行われ、非常に活発かつ充実した意見交換が行われた。この点からも、今回のシンポジウムの開催に際して万全の準備に尽力していただいた張文明教授に対しては改めて

謝意を表したい。

なお、筆者は、「21世紀初頭日本における中華民国期中国農村社会経済史に関する3つの捉え方」と題して日本語で報告を行った。筆者の報告に対して、中国側の参加者からはほぼ好意的かつ基本的に同意する意見が表明された。

Ⅲ. 上海市

今回、我々が最初に3泊した国豊酒店(四つ星ホテルあるいは五つ星ホテル)は、華東師範大学と提携していることから、おそらく張文明の紹介によって優待料金で予約されていたようである。華東師範大学普陀区校舎校内で開催される国際会議や国際シンポジウムなどに出席する外国人の宿泊客にも配慮しているからであろうか、朝食の内容はかなり充実していた。また、同ホテルのトイレットペーパーも柔らかく、全体として高級感が漂っていた。だが、3泊目の夜には部屋のシャワーのお湯が出ないなど、いくつか不都合が生じた。なお、同ホテル内は全面禁煙になっていたために、煙草を吸いたい人は館外で喫煙していた。上海市では、24時間営業の日系のコンビニ(ファミリーマート、ローソン、セブンイレブンなど)も数多く展開している。

弁納才一・小林信介・古泉達矢の3人が上海市滞在中の最終日に1泊した日系ホテル(上海花園飯店)の近くの淮海中路・茂名南路・瑞金一路一帯は、1949年以前は旧フランス租界の一部だった地域で、1970年代末に改革・開放政策が採用されてからは一貫して高級ブランド商品を販売する店舗が軒を連ねる高級商業区として賑わってきた地域だった。だが、今回はかつてとは違って人出も多くはなかった。同日、同日系ホテル周辺のレストラン(瑞金一路の「上海豊裕餐饮管理有限公司」)で昼食と夕食をとったが、やはり客が少なかった。かつては、同レストランの2階席は予約を入れないと、夕食をとることができないほど客が多かった。

上海市街地は、全体として不景気感が漂っていたように見えた。それは、かつてとは違って上海市内で日本人観光客をほとんど見かけなくなったこともあるが、中国人の若年層を中心としてインターネットによる商品の購入(例えば、アリババによるネット通販)が広がってデパートや商店に行かなく

なっていることが大きな要因となっているのかもしれない。

おわりに

今回、訪問した浙江省嘉興市新塍鎮の2つの「新農村」は数年前に建設されたばかりである。ただし、同鎮政府の幹部らと意見交換することができたが、我々外国人が、そのモデル農村に居住する老人たちに直接話を聞くことはできなかった。それでも、筆者は、今回、初めて浙江省の農村を訪問し、10年余りにわたって何度も訪問してきた江蘇省無錫市の農村との異同を感じることができた。だが、江蘇省や浙江省の華東地域の農村が、同じく10年余りにわたって何度も訪問してきた華北地域の農村とは大きな差異があることも改めて感じさせられた。また、シンポジウムを通じて中国の研究者と学術交流することができたことは非常に有意義だった。

今回、農村訪問やシンポジウムへの参加などにおいて華東師範大学の張文明にはいろいろとお世話になった。

2020年2月29日(土)には、華中師範大学中国農村研究院の2人の研究者(同研究院助理研究員の胡平江と張晶晶)とともに、再び張文明らを金沢に招聘して金沢大学環日本海環境研究センター連携部門が主催する文理融合型の国際シンポジウム(「東アジアの農村社会・都市社会をめぐる環境とその発展」)を開催することにしている。

注

- 1) 華東農村調査については、拙稿「華東農村訪問調査報告(1)－2008年3月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第1号、2008年12月)・同「華東農村訪問調査報告(2)－2008年9月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第29巻第2号、2009年3月)・同「華東農村訪問調査報告(3)－2009年3月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第30巻第1号、2009年12月)・同「華東農村訪問調査報告(4)－2010年2月・3月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第31巻第1号、2010年12月)・同「華東農村訪問調査報告(5)－2010年12月、江蘇省・上海市の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第1号、2011年12月)・同「華東農村訪問調査報告(6)－2011年11月、江蘇省の農村－」(『金沢大学経済論集』第32巻第2号、2012年3

- 月)・同「華東農村訪問調査報告(7)－2012年3月, 江蘇省の農村」(『北陸史学』第60号, 2013年2月)・同「華東農村訪問調査報告(8)－2013年9月, 江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第34巻第2号, 2014年3月)・同「華東農村訪問調査報告(9)－2014年3月, 江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第35巻第1号, 2015年1月)・同「華東農村訪問調査報告(10)－2014年12月, 江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第36巻第1号, 2015年12月)・同「華東農村訪問調査報告(11)－2015年5月, 江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第36巻第1号, 2015年12月)・同「消え行く華東地域の農村－江蘇省無錫県の2ヶ村を例として」(東洋文庫近代中国研究班『近代中国研究彙報』第39号, 2017年3月)・同「華東農村訪問調査報告(12)－2017年5月, 2018年3月・5月, 台湾・上海市・江蘇省」(『金沢大学経済論集』第39巻第1号, 2018年12月)・同「華東農村訪問調査報告(13)－2018年5月・10月, 江蘇省」(『日本海域研究』第51号, 2020年3月)などを参照されたい。
- 2) 第2回金沢大学環日本海域環境研究センター連携部門国際シンポジウム「近現代における環日本海域の農村社会環境の特質」(金沢大学サテライトプラザ, 金沢市, 2018年2月23日)。同シンポジウムは文理融合型の研究スタイルを追求したものであった。日本側の報告者は報告順に文系の小林信介・弁納才一・田中比呂志・古泉達矢で、中国から招聘した報告者は報告順に文系の毛来霊・張文明と理系の郭新彪・魏永傑だった。中国側の報告者4名は全て日本語で報告を行った。なお、筆者の報告のタイトルは「民国期山東省農村経済の変容」であり、拙稿「日中全面戦争時期山東省農村経済の変動－惠民県孫家廟莊を例として」(『日本海域研究』第49号, 2018年3月)として発表している。
- 3) 拙稿「華東農村訪問調査報告(12)－2017年5月, 2018年3月・5月, 台湾・上海市・江蘇省」(『金沢大学経済論集』第39巻第1号, 2018年12月)103～104頁。
- 4) 拙稿「華東農村訪問調査報告(13)－2018年5月・10月, 江蘇省の農村」(『金沢大学経済論集』第40巻第1号, 2019年12月)68～69頁。
- 5) 同上拙稿59～60頁。
- 6) 注2)を参照されたい。

補記) 科学研究費助成事業(基盤研究(B)(一般)2018年度～2022年度「社会主義経済体制下の中国農村における社会環境の特質と変容に関する再検討」研究代表者: 弁納才一, 課題番号18H00876)による研究成果の一部である。